俳諧十家類題集

春

へ 5
1645
1

門 ヘ利5
號 1.645
1

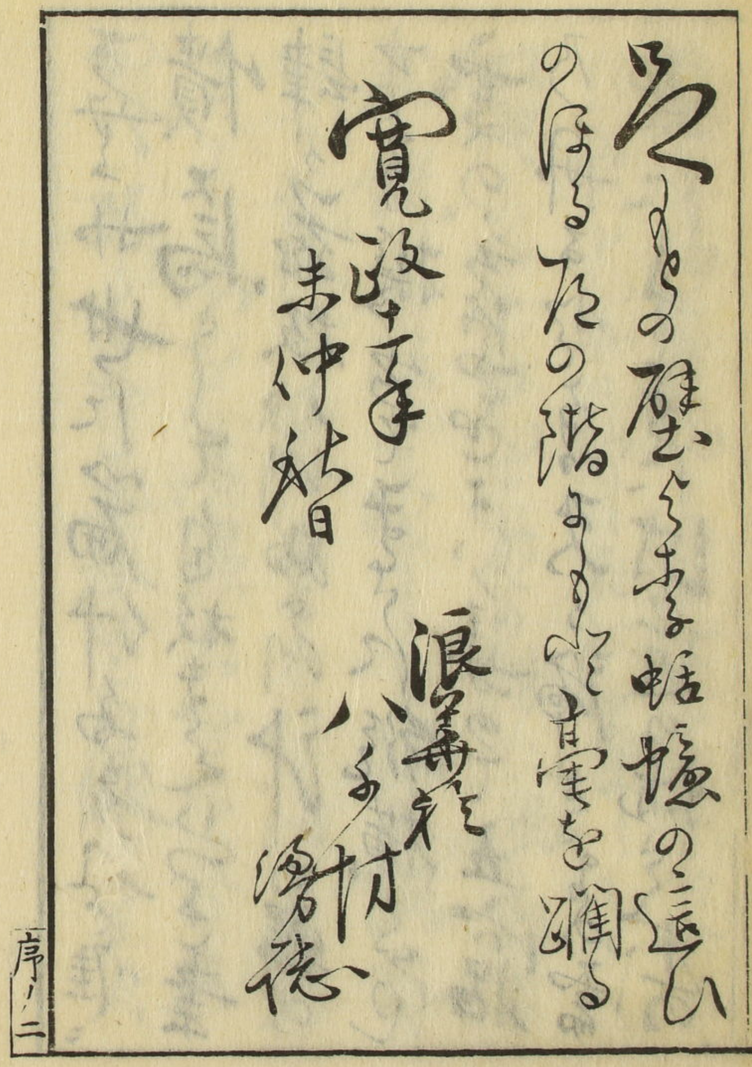
滄浪ひとつを出て主人の例話のごとく
それ事四門に朱八洲とあり梁溫
風流の事廣こゝを今や光陽云
すなわち流れを汲み久々未乃四
海の溢れるなる海いてやナ家
乃風流を集むるにはの四しかるる
有將其影

昭和十年十月購求

意の有馬温泉と見易き事の
はなはだ大なるものなれば墨てたく
解のいと口なきわの世に遊戯の
感慨志ほ事おすこと酒酔れ
のうさはなしかもしきろに浸び新
古ありかなる温泉はなはだ志
かるに彩るきり基自の便とるを免

序一

夏毋世に篇什多きれと唯こ
憤焉として自放まこいつまき妻
肆の義枚ハ川姫り汁の輯の
中より撰出てまさに紙横る免
変の云ふ所をのい集めて五穴貊
乃冊るかとなる矢う編きとるの需
免にしまるに道の訪ふ所



俳諧十家類題集春之部

○ 月部

正月　睦月　初空　年明　今朝春　明の春

初春　千〻春　御代春　花春一　春立　宿の春

元日　初日　歳旦　三朝　年立　年二

日の春　年新　二日　歯朶　歯固　削掛

恵方棚　門松　楪　松錺　錺竹　錺縄

四方拜　若水　雑煮三　蓬莱　喰積　穂俵

野老　小殿原　年男　庭竈　年玉　羽子

破魔弓　試毫四　毫始　初爰　羽衣始　寶引

寶船　子の日　初寅　薺　すゝなこと
菜摘歌　七種五　若菜　帳祝　十一日　踏歌
廿日正月　懸名六　法師指　東風　春風　春雪
雪消　雪間　福寿草　蕗の臺七　巫女　春草若草
春の山　春野　杉菜　梅八　臥龍梅　紅梅
柳十二　青柳　霞十三　雲十四　春雲鶯十五　百千鳥
春夜　春夕　やゝ春　春の宿　霄の春　白魚十六
海苔　春の海　春の水　藪入十七　二月　衣更着
傳奏下り　初牛　薪能　二月堂十九　壽野餘配　涅槃
彼岸　水間　春寒　朧月二十　春月　出代り
雉子廿　燕廿一　春鴈　行鴈　帰鴈廿二　雲雀

雀子　親雀　蝶廿四　蛙廿五　雨蛙　蟇
猫恋　陽炎廿六　田螺　蜆　蛤　取馬　刀
飯蛸　初燕廿一　糸燕　椿　燕　梭　木
焼野　とゝ寝　畑　歩廿三　耕　種下レ　種俵
種う　苗代　芹　芹花廿三　土竜　菜の花
爲賊　猟活　芽ゝ出　山葵　狗脊　蕨廿四
八巾　春雨廿五　三月　上巳　桃節廿六　雛廿七
草餅　國栗　曲　汐干廿八　貝拾　青精飯
巻積　寒食　佛身拭　桃廿九　海棠　梨　花
花廿十　燕廿一　人　花衣　蕗巻廿九　阿蘭陀
燕　鯛　青さ　和布　偶偶師　青麦　ほゝし卅

山吹　蘇　堇　菊苗　茶摘　遲日
炉塞　鳴るみる　柳　鶯　小鮎　蚕　やうこう
別霜　行春　春の暮　暮春　春限　春惜
春を送　晩春　春盡

八千坊　輯校

○正月

睦月　能よ能貝海よ礼けり　睦月　言水
初空　初空しかくそのそろ年の鞍　嵐雪
年の明　ばしくさふ春ひとも有れぬ　沾徳
今朝春　とる朝春の雲
とる朝春の勇ましけり春の雲　嵐雪
ゆる稼ちゆるとる朝のうら　来山

日のひかりとなりて鶯のかくれより　蕪村

四海波魚のうろこ耳にかくれぬる　其角

春の春

初春

房の春まるる所々に都人　嵐雪

後の初春

[illegible]　沾徳

千代春

[illegible]　其角

陸奥春

[illegible]　希因

花春

[illegible]　芭蕉

後の海の水のうらうられの春

春之

宿の春

元日

[illegible]　嵐雪

[illegible]

春之

[illegible]　希因

宿の春

[illegible]　素堂

元日

[illegible]　沾徳

[illegible]　言水

[illegible]　芭蕉

[illegible]　其角

[illegible]

[illegible]

えりも旅人をとゝる大浦うる　沾徳
えりや新茶むつゝ焼て喰　来山
えりや御しうゝいのわり　嵐雪
えりやしらて花のとゝうり
えりやされる野川のまれ　来山
天のゝよ新春をいはし年日新　麦林
年〳〵やし猿よさゝる猿の面　芭蕉
うゝの新こゝ今をとゝやうゝ　嵐雪
年ゝゝやゝ家中の孔を宝角　其角
仏今〳〵やし新年〳〵ゝゝ来の年　芭蕉

初日
歳且
三朝
年立
新年

日の春　日のゝゝとさゝゝうる旅の歩ゝ　其角
年新　掛乗ゝり新元て年の新ゝり　来山
二日　二日ゝもぬゝいせゝるゝゝの　芭蕉
（はつかの睦月二日又はゝゝゝゝ今の春ゝ新ゝゝ）
惟ゝ歳ゝ新ゝゝ春ゝ二日ゝる　嵐雪
歯朶　歯朶の立ゝの七草の後ゝ山辺原　言水
歯固　歯固やゝゝとゝゝゝゝゝの　
削掛　ゝゝゝけ青菜ゝゝの鼻ゝれ　其角
恵方初　恵方初ゝ新色ゝ結ゝゝゝゝ　桃　言水
年宝の四神を求ゝ立ゝの　其角
門松　ゝゝゝゝゝ所ゝ続ゝ門の松　麦林

撰　嵐雪

松餅　芭蕉

餅竹　其角

餅縄　麦林

四方拜　言水

若水　嵐雪

雑煮　言水

蓬莱　来山

三椀の雑煮　蕉村

蓬莱のぞうにの初春　芭蕉

水のにる蓬莱　沾徳

蓬莱の根ざし　言水

蓬莱の根ざしの根雲　其角

蓬莱の井の中に山出る　来山

蓬莱の宮の紀るとき　〃

蓬莱の山にうせん老の春　蕉村

喰積　嵐雪

ひつくとの喰積の支度かな

穂俵　ほくらぶや源れうの白舟　沾徳
野老　とろろうの大系の里ひらり　其角
寛永二年余歳　海老の髭を結ぬ屋を結ぶ小屋の外　言水
年男　白髭のうらうら撰きう年男　〃
庭竈　屋竈牛も新煮を居うきう　其角
年玉　ぶらぶら物ある小路の暮れ　言水
羽子　羽子はまつよ我もあり　〃
破魔弓　ちちちちぶや出羽紅裏四天王　其角
　　月集　小さきの踏うてやうる破魔うねる居る者　来山
試筆　無きうてて筆耕とこ面のうらぶん　沾徳

筆始　大津絵の筆のうら光き仏　芭蕉
初夏　初夏や鄙ひ居る屋ふうり　其角
着衣始　元禄の羽織やし去年の若ふる　言水
寒引　寒引や蝋燭の角をとうとく　其角
寒船　寒船の浦戸の沖やし伝源寺　嵐雪
水祝　ちちちうも女房ちとせんの祝　其角
　　生死のむし男ちとうの祝い　〃
子の日　ちうちうとちとうや知の河ちと糸　嵐雪
初寅　忘れ草を若よ尾上の春おろし　其角

薺

ッえらしつも顔に匂ふる薺かな　其角

百人の宿借ありし薺かな　、

ぬき捨や薺うたうしたるらう　嵐雪

風俊て君もとつれる薺かな　、

薺うつ傍ひ初めあり菜の跡　麦林

鶯を招し網あり芥をつな　、

畑枝の饅をもつて薺かな　、

なひらと　ふらひふた西の老もおひけり　其角

ともに歌　ともらも女は妻かしなんとかは　嵐雪

七種　七種を枯菜まし先るを摘や　治徳

若菜

若菜七くさと訓ず

あく竹や袴をうらみて紙病　其角

内としひの七種斗は寄るらん　、

七種やあはれ一葉に初の入　嵐雪

なりふりをとりえん行く末氣　希因

七種や袴の紐の片むすび　蕪村

こんにやくにけふはうりかつ若菜かな　芭蕉

明杖のなも菜も来りふる菜　其角

傘持て行くまひまうて若菜　、

うつも君萬よし人里の初若菜　、

鳥の声やよみし行くる摘そ　、

[illegible]　希因
[illegible]　来山
[illegible]
[illegible]　麦林
[illegible]　言水
[illegible]　其角
[illegible]
[illegible]　嵐雪
[illegible]　言水

帳祝
十一日
踏歌
廿日二月
懸召

御忌詣　言水
[illegible]
[illegible]　其角
[illegible]　蕪村
[illegible]
東風
[illegible]
[illegible]
春風　来山
[illegible]
[illegible]　蕪村

曙のむらさきの幕や春の空　蕪村

片野なる海苔やまちの風　〃

河豚まくらをぬきて引ふる雪　来山

北国の雲ふるる雪清うして　沾徳

杉を立て屋をとぢる雪哀れ　其角

福寿草　一すじのなみだ　言水

陽炎や雲のこゝろと福寿草　麦林

蕗の薹　弱ゝしくて雲ほる蕗の薹　其角

梅ゝ雪や山ゝと蕗ゝ　〃

仲の雪や抑を蕗の薹　〃

蕗の薹うぶうぶしくて人の踏うれし　嵐雪

蒼ゝとまるる折ふしの蕗の薹　蕪村

芝立　都にてうぐいす鳴く芝の薹　嵐雪

春艸　木ゝのたゝけ雪やとひぬく芝の薹　芭蕉

もゝつたうゝ折るるのくれ　来山

ゝふ艸の枝をうゝて花屋なし　〃

若艸　ゝふ艸や旅用ゝ道なしうゝ　芭蕉

春野山　ゝゝと九日の野ゝ山ゝ　〃

春野　ゝゝの野や本丸を遠の茶金　沾徳

ゝゝの野やなつかしう猟ゝ　来山

杉菜　治德

梅　芭蕉

浮くゝい茶よりてもちる杉菜哉

山寺を万家とせし梅の花

やすらもとくゝ春の中なる梅の香

老爲古宗い梅うりなりうらう

うゝうゝうゝよ春の中なる梅の香

梅咲てうゝ二人の居うゝる

梅うゝ寺に乃ゝと日の生る春代

うゝうゝうゝとうゝみうゝる梅哉

なるる梅よりゝ風もゝうゝ

寺の門ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ梅の香

小枝高せて俤なれむめの乃ゝ　其角

宿のむめ梅ゝうゝうゝうゝうゝ

門ゝと枝のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ梅

むめのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

梅の名をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

第一木のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三日月のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うゝうゝうゝと風の中なる梅の香の梅

樹を梅うゝ
うゝうゝの吹て

猿桂の[illegible]に梅の花　其角

石八の[illegible]て[illegible]中の梅

梅[illegible]く雪宮の[illegible]白こう[illegible]

氷肌玉骨

[illegible]せたるこの[illegible]梅の枝

あせを紙[illegible]あてても梅の[illegible]ひか

[illegible]の[illegible]をとりあてやむめ[illegible]

梅こう雪やしら[illegible]の[illegible]

清[illegible]小[illegible]を拾をて梅[illegible]

梅一輪一[illegible]あ[illegible]

嵐雪

[illegible]

梅[illegible]

梅[illegible]

梅[illegible]の[illegible]

梅の[illegible]

梅こう雪や[illegible]背中と梅の[illegible]

[illegible]

[illegible]

梅の花[illegible]

希因

来山

[illegible]　芭蕉

一時の[illegible]て梅の[illegible]　来山

三味線もふるひ[illegible]梅の[illegible]

[illegible]の[illegible]し[illegible]もいろ[illegible]の[illegible]

[illegible]梅[illegible]

小坊[illegible]振[illegible]せて梅の[illegible]

梅[illegible]

梅の[illegible]てを[illegible]　希因

[illegible]

[illegible]梅[illegible]　来山

[illegible]て[illegible]

[illegible]

梅の[illegible]　沾徳

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]の梅[illegible]

[illegible]梅の[illegible]　言水

[illegible]

梅の[illegible]て[illegible]の仕[illegible]　麦林

麦林

蕪村

[illegible]　蕪村

[illegible]　嵐雪

[illegible]　蕪村

臥龍梅

紅梅

[illegible]　沾徳

[illegible]　芭蕉

柳

[illegible]　沾徳

大井川[illegible]柳しなる

垣折てふくらかなる柳しなる

[illegible]

[illegible]柳の曲を仕ふ垣　其角

柳[illegible]

風[illegible]

曲[illegible]

[illegible]

仕懸の[illegible]

[illegible]柳こう飛　希因

[illegible]　其角

[illegible]

[illegible]　嵐雪

[illegible]　素堂

[illegible]

[illegible]　希因

[illegible]

[illegible]　麦林

[illegible]

青柳

[illegible]　蕪村

[illegible]

[illegible]　来山

[illegible]

[illegible]　希因

[illegible]　蕪村

[illegible]

霞

青嵐

芭蕉

沾徳

言水

嵐雪

希因

蕪村

鶯

芭蕉

沾徳

其角

うくひすや嵐ちらす園のひま　其角

雪よ菜畑ん子のあそび

雪よ雪ちからこゝろみなすうれ

うくひすのひらよいてあそん枝徒

雪の分をとゝまるとうる

雪よあるひとゝまるひとこうえる

うくひすやゆるの白ゝゝ嵐雪

雪よほうゝ山ゝ鳥ゝ山ゝ

雪をなつゝゝゝゝ村ゝ

うくひすの布ゝゝゝれ小物弁

雪の消ゝゝゝゝ仲の夏　希因

うくひすや茶屋の井ゝ新ゝ山

雪ゝゝ雪ゝ茶ゝ水ゝ

ひと日ゝゝ梅ゝ雪ゝ来山

雪ゝゝゝゝ生ゝ雪ゝ

うくひすゝゝ寺ゝ梅ゝ入

不ゝうゝ雪ゝ門

ぬゝゝゝ雪ゝ

雪ゝゝゝ雪ゝ

雪ゝゝ雪ゝ紙ゝ　麦林

麦林

蕪村

春雪晴

百千鳥（洒堂川後本）汐上を抑ふむ色百千鳥　芭蕉

春夜

（本多孫助公）夜の秋をうしろ髪の霜のうつり　其角

春夕

閑性の海を渡るかすみの夕　蕪村

やゝ春

春の月さゝ梅　芭蕉

春の宿　行く春を惜むこころの宿　蕪村

雪の春　筋違ふ人の袋の雪の春

時鳥　俳諧のうつ蕉や雪の夜

公達　孤竹の宵の海

白魚　白魚や黒き目をあく法の網　芭蕉

菜摘　白魚を白雲川の菜摘哉　其角

白魚の　白魚の川を越せる川越

白魚の　漁夫うち蓬ひたるなら

海苔　海苔を下る舟の翼金屏

海苔　海苔ひろふ嵐ヶ崎の海苔摘て海苔摘て　来山

海苔　海苔の味　芭蕉

春の海　春の海陸地乃ごとくにうる　其角

春の水　春の水鮫の髓　蕪村

春の水　春の水かろく絵ちのまとろ

春の水　春の水白きうむの行　沾徳

春の水　春の水の咲うて魚の咲うて春の水

春の水　春の水のうつて濁るうつ　蕪村

養父入

やゝ入りゝやゝ寺籠をとゝのへ羊　蕪村

岩ら又入や　秩父のをゝ山を拿ル

やゝ入るゝ山寺の男こゝ鶏

やゝ入りゝの夏や小豆の煮るうち

籾りゝや金剛あなゝゝの堂宮山

○二月

叙更着

ゝゝちゝゝゝや火燵のうちと松の宅　嵐雪

傳奏下り

傳奏の宅年ようゝる郭又新　沾徳

夏や四条又條の移り下　蕪村

移なゝて日暮ゝゝゝる夏の月

夏の月背戸より田作ゝゝと冥

ゝゝれゝゝゝゝゝ行縄の磬音新

地を捨て入鶏のありしや夏の月

冥蟲ゝの夏ゝゝゝと日くれゝる

やゝ入や松ゝれゝいるゝの光り足　其角

籾りゝや牛合ゝて大京ゝ

籾りゝやゝつゝゝゝゝゝゝ蓑

初午　ちゝ千や　けうちの乳母ちゝ自表　沾徳

初午や　蓑の新ふむ素湯人　

いのちみちゝ　ちゝひとめてや　つゝり山　其角

京の初午

初午や　賽銭ちゝ　ちゝ　ちゝ　

初午や　そのあしの紙ちゝ　英　蕉村

ちゝ千や　ちゝ羽四塚の影のちゝ

ちゝ千や　雨降ちゝ日のあるる

地風のちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　沾徳

薪能

傘や　新の雨乃ちゝ　ちゝし　其角

二月堂　ちゝ　ちゝ　氷の信れ　密の　芭蕉

二月堂餘能

涅槃　不生不滅のちゝ　ちゝ　ちゝ

かゝ井戸の　法法　法ふ人　涅　言水

灯　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　二月堂

餘能　ちゝ　国　栖人　ちゝ　ちゝ　ちゝ　其角

嵐　ちゝ　涅槃の　猫　ちゝ　ちゝ　言水

蓑　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　涅槃

ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　涅槃像　布因

ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ

老婆の　ちゝ　涅槃　ひあり　涅槃像　麦林

石ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　涅槃　像

牛の角　ちゝ　ちゝ　ちゝ　涅槃像

彼岸　涙しぬ無常を怪しむ彼岸哉　其角

雛迄も形ばかりの彼岸哉　来山

金婦ふうふ猴ひとつ彼岸哉　蕪村

水問　ふるふる人に馬ひとつ水問ふ　其角

春雪　ちりぬべし二日の雪の雪　来山

朧月　朧月日日ひとつ雲の出　言水

朧　朧なる梅ひとつ朧月

乗ぬ月後や　朧月　其角

あたたかに花の見さに月雪の

中川やしらさぎ一羽朧月　嵐雪

朧月や雲よりあらはれ出る朧月　来山

なつやこの日ひとつ出る朧月

ちちちちちと玉のくちびるやおぼろ月

海のうるる一雨朧や　れかろ月

蒲団のうへのまくらやおぼろ月　蕪村

ちらり〳〵ちらさんとおぼろ月　布因

魚を焼ひとつ出る朧月　麦林

ふれ人をやもとを小家や朧月　蕪村

業平や女やもとを後月

女倶して内裏有まん朧月

春月　蕪村

出代り　治徳

東潮　嵐雪

雉子　甚角

麦林

蕪村

芭蕉

治徳

言水

甚角

希因

蕪村

嵐雪

雉

雉子啼や坂を下りの駅舎　蕪村

木瓜の陰に皃類ひ住ムきゝす哉　、

むくと起て雉子追ふ犬や宝寺　、

遠山へ通ふ大工やきしの声　、

柴刈に砦を出るや雉子の声　、

日くるゝに雉子うつ春の山辺哉　、

兀山や何にかくれて雉子の声　、

きんしと啼雉子のさへ啼て淀む雪　麦林

茅屋根に鳥見ぬ日てもなく雉　言水

茶のけふり芽にふして里の雉　其角

踏るゝもふされ乃子の煙りめくる　、

海面の虹を吐しきる雉子の声　、

傘に拂はれしとぬき雉子哉　、

山寺に乞食を入て雉子の声　、

川雉子縫されは翁しん雉子の声　、

篁に入るや其人に割りて雉子の声　嵐雪

柳さくらそふて松の見え兆の夕雉子　、

春なかの今朝もかへらぬや雉子の雉　希因

山の名や風より下を雉子　来山

雉やなをさらされて中はこえり　麦林

蕪村

大津絵の筆の line illegible

蕪村

大根の白き line illegible

蕪村

小田の line illegible

甚角

行雁 line illegible

蕪村

帰雁 line illegible

嵐雪

甚角

来山

雲雀

蕪村

きのふ line illegible

芭蕉

line illegible

言水

素堂

耕作の line illegible

希因

帆柱のせうとうおうぎ蒼る　其角
茅屋にはたかるかもしをき雀　麦林
蒼るやいたうう傷るの蚤の新　其角
茶うちんやらけてあるも秋雀　蕪村
郎めく吾妻ゑやんぬる小蝶　芭蕉
百ぢせるぬるう業のてくやうる　其角
行むる蝶あるく行をとをとて
葉屑よ若をとをとて蝶
蝶ちの中猿をひき糸を妻
てくるやゆ行るへ獣の老るり空

雀子
親雀
蝶

蝶

夕日紅所々の紅ことこうる
向ちさきく人をかしちる紅蝶こる　嵐雪
遠い蝶あまてる忘るを久ぢてる　来山
うちくるさ仕ちて行の紅蝶が　蕪村
玉川や蝶ちくるの皆　言水
蓮池よりちの蝶り邪
馬蝶ちくるるもいちれるり　素堂
交かしこうちの河辺の里の蝶　其角
ちくちの蝶るくの湯り紅
ちくやその茶とゆく蝶　嵐雪

結氷の日を帰るとしん蛙哉　麦林

ちるもうらはしく氷る蛙哉　布因

さくられてるふひるやぬ蛙哉　来山

蛙しし丈のうてんとうの枝

行の後よりてはじるる蛙哉

猫結氷前のみ猫のかるる　蕪村

月よ雪く註ふるる田の面の蛙

日八日くれよ雨ちる蛙けと帰蛙

岡よりてさそ蛙我子歩哉

連ふ雪くをるる歩ふる羽の蛙哉

暮

猫　恋　猫のこゑ

大井川　さくらて

思他恋

池の蛙　亀の仕ぬてよ活たふ屋　嵐雪

仕ふる朱やのうまかふふふる田蛙　其角

這出よういやうの下の暮のとえ　芭蕉

麦仕よやたたくこう猫の麦　〃

仕ふ猫の猫の火中ゆく　漆　言水

猫のるやいつく冬のの別　〃

猫のるのもあるるるて人の恋　沾徳

仕ふくたくるるつすつ仕猫　其角

猫のるのうくんつふくれつ仕蛙哉　〃

さくさくの百なさるるよるれ哉　〃

[illegible]

其角

猫の恋ミヤモモヲモ似タリ春ノ川高サ中猫ノ高ソシ恋ノ雪

来山

なまもの食猫ヨ仏寝ていとうかな

嵐雪

西方ヨ聖こうろうり猫のこひ

来山

京所の猫うひきり板屋所

其角

かるうへ人中紫紙の糸ノ猫ノ

芭蕉

うきうへ人中小袋の砂もいきん

其角

紅しぬ火ヨ猫ヲ又西ひる郭

、

呼ろ[illegible]ものろ猫ろ[illegible]

来山

長物ノ

陽炎

[illegible]

其角

かるうへ人中紫紙の糸ノ猫ノ

芭蕉

[illegible]

蕉村

田螺

[illegible]

其角

紫紙の[illegible]

来山

やうろうる角徐く田螺ろる

蕉村

なろうしぶ法ちの中中田螺ある人

、

[illegible]

希因

蜆

一升ヲ[illegible]

其角

石一ウ法き海ヨリ蜆中

、

[illegible]見ろて見ろ[illegible]

[illegible]

、

蛤うり　[illegible]　来山

馬刀　[illegible]　嵐雪

飯蛸（石臣有義）　飯蛸の生[illegible]　沾徳

飯蛸の[illegible]　来山

初櫨

りゝ女[illegible]　言水

人の[illegible]　沾徳

葉を[illegible]

[illegible]　其角

[illegible]　希因

[illegible]

懷[illegible]　菱林

嫁人の[illegible]　蕪村

[illegible]　其角

糸櫨

[illegible]　嵐雪

[illegible]　芭蕉

[illegible]　素堂

[illegible]

[illegible]　希因

[illegible]　嵐雪

[illegible]

玉櫨[illegible]　来山

梅 穂　来山
梅 木　蕪村
焼 野　嵐雪
そらゑ
畑 打　蕪村

畑うつや　、
畑すきの　、
畑すきうつの　、
耕 下　、
種 俵　、
種かし　其角

苗代

苗代や寒さに折るる畦こそし　其角

苗代や一老のちりや庵さき　嵐雪

苗代や葉山ふかれと雲の雲　麦林

苗代のそこに捨て植ん那の　蕪村

苗代や鍬の撫ちりより、

芹

浪州よりつめ芹川ちりぬ　言水

芹花

うすくひや俗よ咲る芹の花　其角

休ふ鶯芹摘るなれ那、

是切り　俳諧芹の中　蕪村

古寺や芹摘ちく捨る芹の中、

土筆

そこく揺やしたはやすつくし　其角

野嵐のこゝろれをくらんにくし、

出またちとたゝ俗くしし　来山

菜の苔

菜のくるやしぬも樹もこゝ雨　言水

尼寺よ出菜のこゝ花義さくら、

菜畑り系こ新るる花つ那　芭蕉

かいやくくつる山ねさし菜移

野の家や菜移つ果を山の像、　来山

なのくるる市夕こ雨つ小風に爰　蕪村

菜の家や月を東こ月を西こ、

鳥絨　蕪村
独活　沾徳
芽独活　其角
山葵　嵐雪
狗脊　来山
蕨　希因

凡巾　言水
凡巾　蕪村
凡巾　嵐雪
凡巾　蕪村

春雨

芭蕉

其角

希因

来山

麦林

蕪村

春雨やものかたりゆく蓑とかさ　蕪村

柴漬の沈みもやらて春の雨　、

春雨やいさよふ月の海半　、

三月

上巳

隠く雛を見るし小家の娘　嵐雪

燭も来くちらつかせけし雛の桃　沾徳

桃節

曙やことに桃花の節のくゑ　其角

桃の花あるしのよりかさゝりたる　来山

雛

三月四日雪ふりける日

三日月もくらく待るや桃の酒　麦林

ふるやその佐野のわたりの雪の袖　其角

見てのさや澄まぬ雛の枕酒　、

御くまし雛の宝や延喜銭　、

雛とりて拗ひまさりける雛の宿　、

ともにつくしや雛に茶しゝて小盞　、

上臈ふと雛のさそふれ祈りより　、

世を捨て我遊ひの雛の娘　、

かはらさの神さいつまそ紙の雛　、

いまもよの言葉ときて

塩竈をわくしれ汐を雛うれ　希因

[illegible]を[illegible]も[illegible]め虎こう　其角
[illegible]の[illegible]　宮[illegible]
[illegible]の[illegible]を一[illegible]の[illegible]
[illegible]も井筒[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]　伊徳
[illegible]　嵐雪
[illegible]　蕪村
[illegible]

[illegible]を[illegible]も[illegible]二[illegible]　麦林
[illegible]　嵐雪
[illegible]の[illegible]の[illegible]　言水
[illegible]の[illegible]　其角
[illegible]
[illegible]
[illegible]　希因
[illegible]

汐干

きぬぎぬの涙よりなる汐干哉　芭蕉
常盤より川も流れて汐干哉　沾徳
汐干をば浪中にして波の車　言水
取うしむ比目を漁る人汐干哉　其角
汐干して多年を次る貝
きのふ乃鋼釣はてしほ干ぬ
一日を尚のこる汐干哉の海　来山
きぬひろれ殆ひかれる汐干哉　嵐雪
毛穢をあらしの砌や汐干潟　麦林
拾を花てけうとく汐干うれし

貝拾

海士のうみ外に町なれば汐干哉　来山
伊勢て貝を拾ふ風の風　沾徳
貝ひろふ中向の赤ぬ流を　其角
子安貝二見の浦を尋ぬる
もとうしと花をもとめる貝
夏浦や塩干るうらの貝
屋ぬうりやかつを上るあの栗
きうれ貝雲のうら浪うしろ人う
江の鳴ぬ貝形ぬうる汐干貝

青精飯

相柳民濃の業飯人う邪　嵐雪

花鎮　言水
寒食　其角
御身拭　佐徳
桃　有永
嵐雪
希因

麦秋
蕪村
希氏
沾徳
蕪村

海棠
梨花

花

梨の花まだひらかや集めぐり　言水

梨の花ちらし尾のかな耳て　、

花の雲鐘は上野か浅草か　芭蕉

淋しさよ花のかたりみなるよふ　、

花を背にちらしめ候や廿日ほと　、

花の山寒房に住やれ坊主達　、

一傑を泣くしかりく花見哉　、

ちや花見に女まじへねらふ後　堂　言水

花見の菊にまじしむらさ竈　、

汎る花楊屋の豊壬生念仏　、

花の春嵐の花や袋ふとる崎　、

伴野桑りかえて人世まれなり　、

下戸花に猿を切て勇那鐵　、

おりふの花蘭をとりて花の信　、

花り中より含浪人第沙し　、

白うろいつ生花にぬ隣七丁程　沾徳

遅く後ろ花に乳ぬく山躰のゆ　、

鶴の尾もし後状らまし花吹か　、

打つなる山や花見の足だより　、

汲いうけて森かとの持や花の信　、

中に氣もなくてうつゝに氣の速き堂　法德
遣付てぬけうつゝ脇出出るこゝ
形ゝとても花の名は世ゝとれうあ　其角
名を花をのくらくゝ花をうりくり
彫笛後養出の時せん淺世界
養るゝ出や酒皮をるゝつる出のん
出ゝけてゆうまうゝうゝ寺ゝう
ゝ氣ゝるゝうゝ作ゝゝんゝ氣ゝる
名さあり中作ダテ出五ゝ出ゝさゝあ
ゝ氣をうゝふくゝ酒ゝる氣ゝんゝを

出形て人の孫なゝ作をうゝん
ゝゝるゝ後ゝゝゝのゝゝ人喧嘩買
大佛修ゝ作ゝゝゝんゝゝのゝ白紙
出ゝゝゝて俳名ん人ゝ後
氣ゝゝゝ修ゝ氣ゝのゝ出ゝ弟
出ゝゝと出のゝゝ節庵
緑ゝゝゝゝゝゝゝ中氣ゝ花ゝ
比風中出ゝのゝゝゝ
極木屋の亭ゝ出ゝゝ
出ゝゝゝゝれを抜ゝゝゝ出ゝ

其角

花ちりてはるかなるまの扇かな、
岩に来て都を幕の片かな、
篭にうつる表書院で浅月代、
屋形あ茶と見る女中出すなり、
月出でや浄国の寺社持りなく、
茶の遂で歌よまん都かへる、
白雲や茶にやうけし新き浮瀬、
背の女能也しみれ沈み女とも、
人を人を恋の姿や茶にゐる、
その花にうかれるかしや小昼、

姑子は百茶に
茶に持して

寸馬亘人

花をゆん住吉の松原は月さかな、
茶は海僧も隠人 着、
茶道おもし茶のこゝろされ好なり、
蓮利狂人いられしや茶出ずる、
寄もさそや家の侍従花は浮花道、
浄城や茶のこゝろえてかくれなり、
此日もし茶見ぬ人や家の道、
此侍従人の延さるゝ見えこゝ哉、
偶偶の鼓うつ音や葉見 哉、
かんさしや散りゆく茶の遊びかな、

[illegible]　其角

[illegible]　嵐雪

[illegible]

[illegible]

[illegible]　来山

[illegible]

古寺や誰うゑおいし花一木　芭蕉

むく鳥の講のこゑのはひうる　其角

山里を人をけうとの花ゑ哉

花の風天女眉をそ歩うき

池を吾花ゑ入相花の影　来山

花生てうれし九蔵や刀脇治

蛍火をとゆ寒ひう寒う那り

小夜ぬや花ゑぬきてもようの山

ちるゑ花や雲のあとと馬のうえ

殺生の花ゑまくらも都こうれ

女人形九

ちる花帰り後ゑ花ゑうゑとらん

義ゑ花ゑ寒て惜うゑれ哉

義るゑゑをよんれよく惜の春

花ちてよい古ひう一ん寺

朽てもう物の花やてさはう

花の名ゑ隙を別ゑいつまてを

花隠ゑてうゑ卯と花ゑん

蕨の芽ゑ峠やゑゑの中ゑ　蕪村

ゑゑゑてゑゑつねむるゑゑ

春の春や渡城のうり大清水

行くとしの暮を伴とせんとそ　蕪村

水の流れ行くてあをく流る人

春のくれて我家とわすれ行く

ふり返て遠く擣よわたつ〻よしの川

夜の春夢を歌く女かな

渡守人の屋ゝつゝの春暮

秋中秋中秋中秋中秋中秋中秋中

ちるや散ちるや散ちるや散ちるや

小冠者出て去れ人を招きけり

春風や傾城中の中の中

春こと踏〻こゝ春風もそよそよ新藁

春の雨ふりて咲さふる白梅

玉川の名所の春の雨の流を出

なしとそ中の酒とそ中の花不

かくれ住て花のたゆたふ僧ゝ

春ちりて本ちの寺ちめりに春

俳諸を懸の世ゝとそてゝ見ゝ

さてゝ春ゝ中ゝ清ゝり山ゝ春の水　素堂

うんきりてゝ中ゝの水流ゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

言葉を下ゝ

芭蕉

芭蕉

言水

佑徳

仙化

素堂

其角

猿のよるる海辺をさらんて猿つれ　其角
山ちらし後こしき伝あぶん
草のしをれんよ蛍後を山ちらし
山ちらし猿を放して猿つれ
明月や猿をあやめこうばし
ちらし後るる孫生ちいえまし
浪世界城禁よ咲ぬ世まちらし
子孫生その二月うや山ちらし
饅頭て人を弱るよやあさのこ
小坊主や松よこうまてしらし

八ツるの山ちらし平一流を
いちさくら小所こう蛍の名所
仁筋のそをを角をうしらし
芭蕉けを半よ笑む後ちくら
ちらし移りくを月恵のをくせよ
浪助や鹿後ろすい猿寺
文を伝ふ猿ふ後
後ひて書ちらし
ちまてこと年歳も猿ふ
京中へ地主のさらし花の猿

妙法院宮
花送られて

白尺生

約束の気をつよくせて梅くさ　希因
下部に浸味をせよ陰さくら　其角
屋敷を拵り毒餅うる梅屋敷　嵐雪
花をよも毛虫よりぶしの出梅　〃
年ぶるを祝やうし祝ひて　〃
あへを人の脊ゝしやさて　希因
よいりの紙をし出りう山梅　麦林
蹴鞠のあれを油ぬやあをさて　〃
達のあい寄るもあやしたらて　〃
廣ふりし陰よりの梅くう那　〃

うちかけて陰ふるくさくて乳　来山
えてうえをたてうし日ふるの山梅　〃
人の月よあるるのるし山さて　〃
本ふるうよりたてさるし陰ふ　〃
世のうるいさ月るしの山さて　〃
九ふるも花ふいたるうも花ふ梅受　〃
ふやまるうのるるうかるしの梅　燕村
陰陽ひと日陰梅のいるうふ　〃
ふるんとしたるをあし月の山　梅　〃
ゆるさ月ふるてうるのるる月ふ梅　〃

みちのくにの山橋　蕪村
雪国の杉の木立の山けむり
まことにもすごしともみえぬ山橋
海ゆかぬ日も照たりてふさぐ　無林
剣刀を佩るるあふひかな
雪雲に入るやまことの山橋
夜梅林を出て咲蕗のはらの人
行士の袂やはらぶしのふるるも
友猿の友ならひをみるもこころ　其角
もゆやうやし流も嬉しそよぐ　治徳

橋人
宗衣

阿蒙院　其角
撫鯛　蕪村
青芒　芭蕉
和布　其角
偶偶師　芭蕉
青麦　治徳

ちの奴ゑびすの鯛ぞ釣ぬるる
阿古久曽のさしぬきふる数ゑぼし
行蒙院もむかしまことの数ゑぼし
洋国の行人あせんにくらたい
まことしやかの蕪小学人
弥生の和布にくるるやの見物
るるまるる成行門や偶偶師
偶偶ゆかゆかの人成小学
まことくるる麦の穂低しひろ芒
青麦のたくうるるる穂のこう

躑躅

王子稲荷にまうでて

名月や本屋一里見のつゝし哉　其角

日夕のうしおさしむらつゝし哉　〃

木香を烏帽子にきせん岩つゝし　〃

ゆるさきつゝ新たんとふ小岩つゝし　〃

小鳥居をくゞるの縁かつゝし山　〃

谷つゝしむかしゆかしの角櫓　嵐雪

つゝじ咲て片山里の飯白し　蕪村

近道へ出てうれし野のつゝじかな　〃

つゝじ咲て石移したる嬉しさよ　〃

岩倉の擬宝彩光のつゝしかな　〃

山吹

ほしのやいかぬ浅き麦畠　〃

山吹を盛る玉ぞ露そうき　其角

月影は山吹色のありなし　〃

山吹を折して深く淵の上　言水

山吹やしほ結ふ瀬をなかしうき　希因

山吹やまとに流れて水の底　麦林

蓑咲て鮮くな日をいふへかり　其角

藤

手の新や籠ゝるゝ藤の棚　〃

山蓑を施くさてま浅さる哉　〃

よ所にて見ぬ石のなほや藤の花　〃

藤咲て猶さへゆらりゆらりと候　嵐雪

小坊主や松にかくれて山の藤、　来山

ゆきもどる人の隠れやあの峰の藤　希因

中空をうかれ出たるや藤の花　[illegible]

うたゝねのさめてうらめし藤の茶屋　蕪村

しなをもる夜の米踏みやし藤の花、

菫

骨拾ふ人にしたしき菫の花、

居りなからちる花よそこらにきのう、

土橋うへに都を咲ける菫かな　希因

菜畑

菜の花や流れきりたる扇の[illegible]　治徳

菜摘

紫の里や菜摘のすさみより　其角

遅日

遅き日や雉子の下りゐる橋の上　蕪村

山鳥の尾をふむ春の入日哉、

遅き日のつもりて遠きむかし哉、

炉塞

炉塞で南阮の風呂に入身哉、

炉塞や床は維摩に掛替る、

呼子鳥

松風や盲の坊の呼子鳥　言水

何よりもめでたくなりし呼子鳥　其角

柳鮠

まづ秋の木の葉を柳鮠　嵐雪

小鮎

鮎小鮎白きものゝ泉かな　素堂

蚕　孫ともの春やしるする日のうる　其角

とうけ　ものとしとしひとをまつ　来山

別霜　とまを出の月ふ法華やまれ義　沾徳

行春　行春をとしの人と問しらる　芭蕉

りまちやし独り残る行の元貞　其角

ゆくまちや撰ぶくるいりの秋　蕪村

後年の盟もそうてゆくまちや　〃

りまちや白さ夜の四塚のしま　〃

りまちや撰出をくむ分れを　〃

ゆくまちやむくるとれさるる鈴羽山　〃

春の暮　行春やハのことを出たし　希因

りまちや絹のとをくぬさくり川　〃

後年の人のものくさ松をそるれ雪　蕪村

小雨ひけるを春をたる中の雪　〃

と井ちるへ後をとをうてまちるぬ　希因

暮春或人弱を返分なさを女房よくをのを孫　蕪村

春限り　まさ中ふるる日の春のうこう郎　〃

春情　多福して庭ふむ人やしまり惜む　〃

まちをむ春をの驕白小百五万　〃

まちむ方やけをの玉大雄　〃

春伏送　　其角

晩春　　素堂

春盡　　蕪村

俳諧十家類題集春之部終